
Ladies

黒澤 倫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ladies

【Nコード】

N2002V

【作者名】

黒澤 倫

【あらすじ】

友人を陥れた女がその友人に仕返しをくろう話
それに巻き込まれる可哀想な男達

人を呪わば穴二つ

友達の頼みでホストをやるはめになった。

「玄【しずか】様、お願いします！ その顔を一週間でいいからお貸し下さいませ。一生のお願い」

今までに一生のお願いを何度頼まれたことか。

泣きつかれたぐらいで頼みをきいてやるほどお人好しでないが、そのときの俺は落ち込んでいたために適当に相槌をうって了承してしまい、彼に連れ去られ、気がつけばホストをしている。

「超爽快！ あの女を思い出すだけで笑えてしょうがないわ」

まあ、臨時のホストはバイトみたいなもので、とりあえずにこやかに女と会話し、彼女達の機嫌とりをすればいいだけの仕事だ。今日が最後の日で、ここで働いたのはたったの一週間だが、わかったことといえば、女は女の恐ろしさを知らない。

目の前で高笑いする女がその1人だ。どうやら長年恨んでいた友人に仕返しができたらしい。

俺も彼女に合わせて笑いながらも彼女を嘲笑う。

人を呪わば穴二つ。

バイクの女

夜のコンビニに買い物に来たのがいけなかったのか。いや、そうじゃない。夜中に迷惑な不良がいるのがいけないんだ。俺はマンゴープリンを買いに來ただけだというのに、不良に絡まれた。

「通行料払えよ」

不良の1人が鋭くもない犬のような目で睨んで脅してくる。釣り目な俺の方が迫力を出せる自信があるよ。1対1ならね。1対複数なら1が負けるに決まっている。

頭の隅でそう思う気持ちと誰がお前に金を払うか。今の俺の財布の金はマンゴープリンのために払う金だ。と憤慨している気持ちが徐々に俺の中で混ざっていく。

結局、どうしたかというと、俺は財布を彼らに寄付した。

さらば、俺のマンゴープリン。お金で解決できるなら、平和でいいじゃないか。

チキンでは決していないよ。お金より自分が大切だから。

虚しく夜空を眺めながら、帰ろうとすると、バイクから降りて、コンビニに向かう女とすれ違った。

ふと、彼女は不良に絡まれないか心配になり、店を振り返ると、俺と同じように彼女も絡まれている。

ポケットのケータイを握りしめて、すぐに110番に連絡できるようにしておく。

「だから、金出させていってんだっ」

どうやら彼女は拒否したらしく、不良が声を荒らげたが、最後まで言えずに金的攻撃をくらって悶え苦しむのを見てしまったのは夢だろうか。他の不良達も啞然として、ただでさえ静かな夜に沈黙が流れ、彼女の台詞が俺のところまで聞こえた。

「そんなに欲しけりゃ己のキン○マ出しゃいいだろうが」

悶える不良に同じ男として、多少同情してしまう。

そのあとはアクション映画でも見ているかのようなだった。

仲間の仇として不良達が彼女に襲いかかったが、無惨にも返り討ちにあい、逆に彼女にお金をとられていた。

「慰謝料出せや」

今の状況はどうみても、彼らが被害者だ。

「あ、俺の」

彼女に手渡される俺の財布をみて思わず声をあげたら、彼女がこっちに顔を向けた。

やばい。

顔を逸らす。

目を合わせちゃいけない。そんな気がした。

「佐野秀」

「え？」

自分の名前を呼ばれて彼女を見ると、俺の運転免許証を読みあげている。「ふうん」

興味がないのか、彼女は千円札を俺の財布から一枚抜き取って、こちらに財布を投げ渡してきた。

「拾った感謝料として1割もらう」

そう言って、彼女は店に入っていた。

そのあとを追うように店に入った後、俺は彼女と最後のマンゴープリンを争った。

夫の苦悩

結婚して一年が経った。

この結婚は間違いだったのかもしれない。

その理由はひとつ。

私は妻に嫌われている。

結婚して半年ぐらいから薄々とそう思い始めた。

1年前を思い返すと、最初から嫌われていたんじゃないかと思う。

理由はわからない。ただ彼女は どうして私と結婚したのかわからない。

「……悦司さんのことは嫌ってませんよ」

喫茶の中で妻の友人の宇佐美玲子さんに相談してもらっている。内容はもちろん妻の遠子のことだ。

「しかし、遠子は私を避けている。結婚して一度も夫婦らしいこともできてない」

玲子さんは困った顔して頼杖をついた。彼女は一言でいうと美人だ。黒髪は長くて艶があり、身長も女性にしては高く、スタイルもよい。彼女はモデルをやっていると言えば誰もが納得するだろう。

「遠子はわかりにくいのかもしれませんが、あの子は嫌いな人とは結婚しません。したとしても別居します」

彼女の真剣な目が私の目をみる。

ほっとしたからか、自然と笑みがこぼれる。

「遠子の友人である玲子さんがそういうなら、信じます」

「ただ」

鋭く突き刺さるような冷たい目が変わった。

「遠子の嫌がることはしないように。やってしまった場合、彼女の気持ちに離れるということをお忘れなく」

「それはない」

彼女の右眉がピクリと痙攣した。

「私は臆病でね。いまだに遠子に嫌われるのが怖くて手が出せない」
今度はポカーンと口をあけて放心している。

よく表情の変わる人だ。

「ちょっ、え、手出してないって、やってないってこと？」

あまりの衝撃なのか口調が碎けている。

思わず笑ってしまった。

「そうだ」

彼女は勢いよく水をグビグビと飲み始め、叩きつけるようにテーブルに置いた。

「悦司さん、一年間どんな夫婦でやってきたんですか？」

苦笑してしまった。

「夫婦というより、他人同士気を使って生活しているような感じかもしれないな」

彼女は気が抜けたようにテーブルに額をつけた。

「奥手すぎるにもほどがあります」

私にとって遠子が初めての女性であるからしかたない。とは口には出さなかった。そのせいで、女性に対して、好きな人にどう接したらいいのかわからないのだ。

「悦司さん！」

彼女は勢いよく顔をあげた。

「遠子と距離を縮めることから始めましょう！」

「お、おう」

あまりの気迫に驚いて、彼女につられて頷いていた。

まずはデートから

玲子さんに相談してから3日後。

遠子と仲良くなるため、ゼロから戻ってみることにした……まあ、1さえ進んでいなかったかもしれないが。細かいことはとにかくまずは玲子さんのアドバイスに従って、「遠子をデートに誘う」。

玲子さんに相談して気が付いたのだが、私は一度も遠子とデートをしたことがない。一緒に夕飯の買い物さえしたことがない。玲子さんが呆れたのはもちろん、私自身そのことに気づいて衝撃的であった。

今思えば、荷物持ちで付いて行こうとしたり、車を私が運転して行こうとしたが、

「いつも仕事でお疲れですから、家でゆっくりしてください」

「今日は自転車で行きたいので、車はいりません」などと断られてきた。

……やっぱり遠子に嫌われて、いやいや、きっとタイミングが悪かったのだ。

今回は違う。なにがなんでも約束をとりつけて遠子とデートをする。まずはそこからだ。

仕事から帰宅し、リビングのソファアに座ってみかんを剥いている遠子に話しかける。

「遠子」

彼女は振り向いた。

右目にホクロがあり、タレ目であるせいか、微笑を浮かべて優しそうな表情をしている。腰まで伸びた黒髪は左肩におろしている。

「日曜日にどこか出かけないか？」

剥いている手を止め、彼女は一拍間をあけたあと、微笑する。

「はい。ちようど行きたいところがあるんです」

よし！っと思わず拳を握る。

「どこ？」

「馬に行きませんか？」

……馬。

「ああ、動物園ね」

彼女はキョトンとした。そして横に首を振った。

「競馬場に」

「競馬かあ……」

言葉の意味を理解した瞬間、私の頭は思考を止めた。
なんだって？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2002v/>

Ladies

2011年11月15日17時00分発行